

■ 戦略経営研究会 117th ミーティング議事録

日 時：2017年8月5日(土) 14:00-17:00

場 所：東京／竹橋「ちよだプラットフォームスクウェア」

テーマ：若者による社会課題解決の力

～美濃加茂市の「若者委員会」と九州鹿の解体処理流通販売一体ビジネス～

発表者：後藤寛勝さん（NPO法人僕らの一歩が日本を変える。代表）

三浦大輝さん（九州ほんものマイスター代表）

参加者：12人

（財務コンサルタント、金融経済アナリスト、会社経営、会社員、大学教員、
NPO 法人理事長、行政書士、司法書士等）

後藤寛勝さん：

目次：

1. 僕らの一歩が日本を変える。の最近の活動
2. 僕らの一歩が日本を変える。の票育
3. 僕らの一歩が日本を変える。若者委員会
4. まとめ

発表：

1. 僕らの一歩が日本を変える。の最近の活動

10代からから、僕らの一歩が日本を変える。の活動を始めました。大学生の時に、NPO法人化しました。現在は、会社に勤めながら、NPO法人の活動をしています。大学生の時に、内閣府RESASの委員を務めました。ビックデータを活用して、数字でわかりやすく政治参加を増やすというものです。昨年、18歳選挙権が実現しました。このインパクトは大きいです。高校生、大学生の意識が変わってきています。それ以上に、政治が若者に近付いてきました。「18歳からの選択」という共著も出版しました。中学生、高校生向けの本ですが彼らの親にも評判です。また、総務省と文化放送の若者啓発のキャンペーンも受託し、去年1年は若者の政治参加に力を注いだ年でした。現在、は制度上の壁を超えるために、NPOとは別に被選挙権年齢の引下げのための提言を行っています。18歳選挙権は認められましたが、若者には投票先がありません。選挙の立候補者は一番若くても25歳です。また、実際の立候補は30歳以上からです。これでは、年代だけでなく、感性の格差も生じています。これが、直近の目標です。

2. 僕らの一歩が日本を変える。の票育

僕らの一歩が日本を変える。は、若者と政治に新しい出会いを届けることを目的にしています。若者と政治には、①興味、②理解、③参加というプロセスがあります。現在は、選挙管理

委員会の選挙に行こうキャンペーンなど、興味に比重が置かれています。しかし、これで良いのでしょうか？ 若者は政治が自分に関わっていると理解するまではある程度簡単です。しかし、参加は決定的にないのが現状です。僕らの一歩が日本を変える。の①興味のための事業は、「高校生100人×国会議員」です。永田町の議員会館にて高校生100人と国会議員のワークショップを行っています。地方の高校生に比重を置いています。片道の交通費と宿泊費を協賛金にて賄っています。開催初期のころの高校生が、政治に興味のある大学生、社会人になっています。カード&ボードゲーム「CANVAS」もあります。政治家になりきって、政治を学ぶというものです。地方自治体から引き合いが来ています。僕らの一歩が日本を変える。の②理解のための事業は、票育です。18歳選挙権の教育のために、学校の先生が困ってしまいました。そこで、地域において政治がいかに動いていて、お金がいかに動いているかを理解してもらう。「自分の住んでいる地域や社会の課題を発見する力」、「課題に対する選択肢を見出す力」を育成する。地域の中学生、高校生が主体となって、若者による若者のための政治教育のプログラムを開発し、ご提供しています。これは票育の授業として、学校のカリキュラムに組み込まれています。また、票育のスタッフを育成する「票育CREWSHIP」は半年間、フィールドワークと研修によるインプットを行い、その後、アウトプットを行うというプログラムです。社会への意識を高めることができます。現在、票育は、日南市（2期目。日南学院の先生にてサイクルを回せるようになりました）、大村市（大村市版CANVASをアウトプットしました。現在、教材になっています）、美濃加茂市で行われています。

3. 僕らの一歩が日本を変える。若者委員会

僕らの一歩が日本を変える。の③参加のための事業は「若者委員会」です。25歳未満の若者は政治家になれません。左記の若者に地方自治体の中で政治参加の機会を作ることを目的としています。昨年、米国のポートランドに視察に行きました。ポートランドは全米一、政治参加が進んでいるとされています。ポートランドの市議会には5人しか議員がいません。政策は市民が作っています。「ネイバーフッド・アソシエーション」という地元組織が政治を主導し、予算の執行もしています。これを上位組織である「地域連合」が運営指導しています。そして、この視察の成果として、美濃加茂市の若者委員会となりました。25歳未満の若者による行政機関であり（公的なものです）、若者の政治のための場所を作っています。現在、美濃加茂市長の任命にて、任期中です（本年4月より）。プロセスは、①政策デザイン（課題発見力・課題解決力を育成）、②票育（カリキュラム作成）、③政策ブラッシュアップ、④若者フォーラムです。提言の策定だけでなく、予算を付けて、執行していきます。このためのミーティングを繰り返しています。また、地方自治体の中にバックアップ体制の整備をしています。

4. まとめ

まとめとなります。日本には、子ども・若者省が必要です。しかし、国で作るのは難しいので、まずは地方自治体からです。それが若者委員会です。若者に役割を与えること、君が必要だと承認することが必要です。具体的には、行政の中に若者の居場所をつくることで地域が

前に進むモデルケースをつくり、自治体自体の、成功体験をつくることです。そこから、ダウンさせていきます。テーマは参加です。希望ある社会とするために、いかに実現していくか。これからが大事です。

三浦大輝さん（九州ほんものマイスター代表）：

目次：

1. 九州ほんものマイスター立上げのきっかけ
2. 鳥獣被害の現状
3. ビジネス視点からのジビエ
4. 屋久島での新たな取り組み

発表：

1. 九州ほんものマイスター立上げのきっかけ

仙台市出身です。高校生の時に東日本大震災があり、被災しました。被災地にてボランティアを経験し、人のために何かできないかと考えました。また、農業に可能性を感じ、ビジネスにできないかと考えました。大学受験の際に、本命の大学は不合格でした。すべり止めは合格していましたが、行きたいとこでなかったため、起業してしまおうと考えました。そのために人脈をつくりたい、また、行ったことのないところに行ってみたいと考え、九州へ行きました。1年間を過ごしました。その中で、八代市の農業生産法人「水の子」と出会いました。その社長に薦められて、畑の土をなめてみました。農家のこだわりが気付くことができました。とはいえ、農家は低所得です。農業を魅力のある産業にしたいと考えました。そこで、東京農業大学を受験し進学することとしました。これは、東京圏の消費者をつかまえるためでもあります。東京農業大学やほかの大学から仲間を集めて、九州ほんものマイスターを立ち上げました。取扱い商品は、八代市の「水の子」の蓮根饅頭（自然栽培米の皮を使っています）、靴の中敷き「い草魂（ソウル）」などです。い草魂は無農薬のい草を使っています。商品開発も行いました。これらの商品をマルシェで販売しています。秋葉原、代官山、中目黒などのマルシェです。売上げは大きくありませんが、お客様の声を直接聴ける機会となっています。

2. 鳥獣被害の現状

鳥獣被害は、平成25年度、農産物被害199億円となっています。森林被害年間213億円です。そのうち、7割がシカによる被害です。観光資源被害、人的被害を加えると約500億円に上るとされています。この背景は、①鳥獣の生息域拡大（少雪の影響）、②狩猟による捕獲圧の低下（猟師は70代、80代が主体。若い人がいない）、③耕作放棄地の増加（人間活動の低下）などです。農林水産省は10年後にシカ・イノシシの生息頭数を半減という目標を掲げています。この達成は難しいのではないのでしょうか。しかし、減らさなくてはなりません。

3. ビジネス視点からのジビエ

ジビエ肉の利活用のためには、消費を拡大させる必要があります。しかし、捕獲されたシカ

の90%以上が埋却・廃棄されています。猟師の高齢化のやめに、山から降ろせないということもあります。シカ・イノシシの食肉活用は5%に留まっています。農林水産省は2019年までに食肉利用率30%を目標としています。現場からの視点からすると疑問です。現在、ジビエ料理を扱う店は全国に900店舗です。1年前は600店舗でしたので急増しているようです。これは、ぐるなびのデータによりますので、実際は1000店を超えているかもしれません。学校給食への導入（和歌山県など）、ペットフードへの活用（骨など）、イオンなどスーパーでの取扱い（長野県など）も行われています。とはいえ、スーパーではあまり売れていないようです。これは過程でどう調理するかわからないからです。また、課題もあります。猟銃使用の場合の鉛弾の危険性です。鉛は人体に悪いです。北海道では条例で禁止されています。鉛弾の破片が被狩猟物の体内に拡がってしまい、除去は難しいです。また、金属検出器もありますが、高価ですし、性能も鉛弾の検出は難しいようです。

私が事務局を務めます日本ジビエ振興協議会のジビエ普及の取組みをご紹介します。農林水産省、厚生労働省と流通規格の整備のためのガイドラインを策定しています。ラベルやトレーサビリティ、カットチャートなどです。ジビエについての情報開示を行い、消費者の安心へ結びつけるために、衛生管理ガイドラインの策定にも力を入れています。これらは、本年11月に公表される予定です。また、トヨタ自動車と協力して、ジビエカーを開発しました。これは、移動式解体処理車です。冷蔵までできます。しかし、価格は1800万円です。農林水産省の補助金を付けても、補助率1/2ですので、900万円の支払いが必要です。とはいえ普及が必要と考えています。猟師は軽トラックで移動しています。これですと、ジビエは直射日光を浴びて、すぐ腐るからです。

鹿肉の解体、処理の工程は牛などの精肉の工程と同じです。九州ほんものマイスターと連携する処理・加工施設では、歩留りを40%にしたいと考えています。また、九州ほんものマイスターでは、鹿肉の唐揚げなどの開発や、飲食店へのご提案を進めています。

4. 屋久島での新たな取り組み

屋久島には鹿が約3万頭います。毎年約5000頭を駆除しています。とはいえ、頭数は横ばいが続いています。駆除した鹿の95%を廃棄（埋設）しています。現在、九州ほんものマイスターのメンバーにて、屋久島の鹿肉を解体、処理、流通、販売などする会社の設立を進めています（大学生による起業）。屋久島の南部に鹿の解体施設を立上げ、加工も行います。島内飲食店や東京圏への販売を行います。また、解体鹿の残渣問題への対処も行います。産業廃棄物として処理ではなくバイオマス・エネルギーとして活用します。イスラエルのベンチャーからメタン・ガス変換の機械を導入します。鹿肉残渣を漁業にも活用します。養殖用の餌にします。

会社設立に先立って、大学生（九州ほんものマイスターのメンバー）2名が移住します。8

月9日に旅立ちます。屋久島は屋久杉だけじゃありません。タンカンなど熱帯フルーツも豊富です。大学生による情報発信をしていきます。ジビエだけでなく屋久島の活性化を目指します。屋久島を世界一の魅力あふれる島とするために貢献します。

以上